

戦争と若者の未来を考える

私たちはなぜ戦争を忘れてしまうのか

去る11月3日、市民意見広告運動と市民の意見30の会・東京は、東京ウイメンズプラザにて「講演とライブー戦争と若者の未来を考えるー」を開きました。この集会は毎年5月3日に全国紙に掲載している市民意見広告の、2014年度の掲載へ向けてのキックオフ集会として開催されたものです。ゲストは澤地久枝さんとシンガーソングライターの寺尾紗穂さん。

ここに集会の模様をご報告し、これから始まる第13期意見広告運動にみなさまが共にキックオフしていただきますよう心から訴えます。

(まとめ・文責 本誌編集部・有馬保彦、阿部めぐみ/写真 本誌・對馬 勇)



第1部  
澤地久枝さんの  
お話



「九条の会」の呼びかけ人のお一人で、反戦・反改憲の立場から各方面で活躍されている作家の澤地久枝さんは、私たちの市民意見広告運動を賛同人として第一回から支えてくださっています。若者の未来を考えるということは、今を私たちがどのように生きていくかが答えだと思えます、と、語り始められました。

特定秘密保護法案の恐ろしさ

日本の政治状況は絶望的です。選挙は参議院も衆議院も圧倒的多数が投票した訳ではなく、ほぼ半数が棄権をしています。自民党はその中で数の上で一番多かったというだけで、全体の多数決で選ばれた政権ではありません。それが今のうちにやりたかったことを全部やるうとしています。

今一番、焦眉の急というか大変なことは「特定秘密保護法案」です。これを閣議決定して、臨時国会で可決しようとしている。この法案が私たちの基本的人権一切を無視するものであるだけでなく、未来へ向かってどんなに閉塞され、恐ろしい懲罰を用意する国になるかということです。何が秘密ですかと聞くと「それは秘密です」という言葉が流行っていますね。行政府の長官などが「特定」しなければならぬと言った瞬間、「特定秘密」になる。都合の悪い政治の問題がたくさんあ

れば、それを全部「特定秘密」として括ってしまえば、秘密にたずさわる人は何も言えなくなる、漏らした場合の懲罰は10年、1千万円以下の罰金となる。誰が秘密の「特定」に関わるのかの人選が問題です。政府は関係者の過去の考え方を調べ、反権力的な考え方を持っている人はもちろん、飲酒傾向、精神病歴などプライバシーを調べ、すべてが調べの人たちの手に行く。ひどいプライバシーの侵害です。これはアメリカのマッカーシズムに似ています。対象者は仕事がなく、収入がゼロになる。米国の警察は、この人間はと思う者の資料を集め、後をつけ、記録を残し有罪にしました。

いま「特定秘密保護法案」は閣議決定されて、論議を尽くすことなく、成立する可能性が高いのです。この法案をなんとかしてくい止めないとこの国は暗黒社会になってしまいます。それは戦争中の軍事機密保護法、軍隊が絶対だった軍国主義の時代よりも悪いものです。昔、特高警察で恐怖政治をしましたが、これほど無限定の法律はありませんでした。

「特定秘密」を守る義務は、本人だけでなく家族全員にも課せられます。継続に継続を続けければ「永久秘」になる。誰かがその秘密

に関わってしまうと家族全員がしばられて、退職後も、同じ守秘義務を負い、家族もまた負う。個人の生活、家族を含む生活を拘束する法律、まわり中を巻き込んでいく法律が、この11月中に通されようとしています。これを通してはなりません。

憲法9条も96条もその他、人権に関わる今の憲法を守っていかねばなりません。特定秘密の中で議事録も残さず、何かが決められるとどうなるのか。今の政権が狙っている集団的自衛権を現実のものにして、アメリカがやる戦争にはりついて戦おうという体制が生まれてくる。安倍首相は、自分を支持している人は有権者の何割かに過ぎないと考えている。それで今のうちやらねばならない、今なら駆け込みで何とかなると考えているのです。

## 68年間、日本は戦争で人を殺していない

アメリカは軍事費を削り、国家予算の赤字をへらそうとしています。日本はアメリカの海兵隊の一部のグアム移転に費用をだそうとしています。日本とアメリカとの関係で、日本は独立国ではありません。日本は1千兆円の国の借金をどうやって返すのか。子や孫につけを回そうとしているのです。アメリカは世界中で戦争をする意思がある。日本は直ちにそこへ参加する。費用は日本もちだからアメリカは平気です。

日本は68年間、公式な戦死者は出していま

せん。世界中でも例がない戦死ゼロの歴史があります。それは、日本人が戦死しなかっただけでなく、日本人によって戦闘で殺された外国人が一人もいないということです。でもこのままだと、私たちの子や孫がアメリカのやる戦争で戦死する可能性が現実のものになります。

## ささやかな思いから繋がりをつくらう

全国で反戦・反権力運動があるが、まだ声が小さい。安倍内閣に引導をわたす力にならないですね。

小田実さんは『大きな人間は大きなことを、政治や文化を動かしたりするけれども、それを実際にやるのは小さな人間である。小さな人間が嫌だと言ったら大きな人間は何もできない。小さな人間が実は力をもちうる』と繰り返し繰り返し、言いました。『その人たちがまず、自分の意見をもつ。自分の意見をもつて判断をして、次に行動にでる。デモもあるし、署名もある、もっとほかの方法もあるかもしれない』と小田さんは言っています。

小田さんなら『政治家たち、お前ら何をやってるんや』ときつと言いますね。

私は何でもできることはやろうと思います。天皇に手紙を渡した山田太郎さんの議員資格を奪おうとしている議員や右翼がいます。右翼は、落ちこぼれた子供たち、行き場がない子供たちにご飯を食べさせ、拾いこんでいく。この子供たちは自分で考える習慣をもっていない。

い。受け入れてくれたことがうれしくて右翼にいく。そういうゆがんだ社会を私たちは受け入れているのです。戦争と若者といいますが、戦争が良いとはだれも思っていない。私は60年安保のとき国会を包囲したデモ隊の中にいましたが、あの60年に生まれた人が、今の子供の親たちなのです。日本はこの68年の間に戦争の体験記憶を忘れてしまった。戦争が格好いいと思う、あるいは何も考えない人が出てきました。私たちは、こういう時間の中で、今、この集会をしているということです。私は絶望したくありません。生きています。自分の意見をちゃんとやっていきたい。それも効果のある方法でやっていきたいと思っています。

私は福岡の「赤とんぼの会」の新聞広告募金の第一号だと言われました。うれしかったですね。ささやかな喜びでも、自分の中のエネルギーが消えないよう、弱くならないよう、ささえていくこと。たとえば孫がかわいいとか、わが子がかわいいと思うならば、『その子の命が戦争によって脅かされるときにお前ははどうするのか』と、その気持ちを膨らませ延ばしてほしい。そうすると祖母として、母として何をしなければならぬのか、いやでも考えが浮かんでくるはず。女たちの知恵が求められています。

自分の思いから繋がって行くことが今私たちに求められている答えだと思います。一人

一人が自覚してよく自分の考えを整理し、批判する目をもって己自身の人生をどうするか考える。私はいまある人と人との繋がりを切らないようにしたい。この繋がりがさらさらに大きな繋がりが生まれることに努力したいと思います。

## 多喜二の時代を忘れない

最後に、若い人に聞いてほしいことがあります。小林多喜二という作家がいて1933年2月20日、スパイに売られて特高警察に捕まりました。私服の特高たちが「泥棒、泥棒」と叫んで追いかけて、近所の人たちに捕まえられたのです。彼は吊るされ殴られ、右手の差指は折られ、全身皮下出血で死亡しました。孫をおぶってねんねこ絆纏はんてんを着た多喜二の母が築地警察署に入り、心臓麻痺で死亡という書類に判を押して遺体をわたされました。さらにお通夜や弔問に来た人たちはみんな捕まりました。

読み書きが出来なかった多喜二のお母さんは、非法法生活中の息子との連絡の方法としてひらがなを習いました。通夜の席で、痛ましさに見守る友人たちの前で、お母さんは、「それ、もういちどたたねえか」「みんなのために、もういちどたたねえか」と言ったとい

います。いいことだけが人生ではない、小樽で貧乏な暮らしに耐え、養ってくれと思っていた息子が非法法生活の果てに惨殺されて帰って

くる。『ああまた、この二月が来た、ほんとうに二月という月がいやな月、声をいっばいに泣きたい、どこへいっても泣かれない、ああ、でもラジオで少し助かる。ああ涙が出る、眼鏡がくもる』とお母さんは書きました。

多喜二は戦争で死んだわけではありません。「特定秘密保護法案」が通るような世の中になれば、こういう嘆きを味わうお母さんや、こういう思いを味わう女のひとが出てくるかもしれないということです。私はみんなが平和に生き、存分に生きていける世の中にしたいと思います。

多喜二が死んだとき、魯迅は電報を打ち「われわれは知っている、われわれは忘れない」と書きました。この前の戦争について「われわれは知っている、われわれは忘れない」と私たちは言い切れるかどうか。戦争体験のある人たちがほとんど退場した今、私たちは戦争がどういふものか伝えられるでしょうか。

私のなかに、父の肩車で、真赤なものを見た人生で最初の記憶があります。昭和8年です。だから説明がありませんでした。桐生悠々が書いた「関東大演習を喰う」を読んだのでわりました。それは日本で最初の防空演習だったのです。その演習で敵の爆弾が落ちた想定で燃やしたものが私の見た、真赤なものでした。

私は9月に83歳になり、生きていることが不思議なくらいです。仲間たちはみんな亡くなり、もういつ人生を終わってもよいのです



が、68年間戦争ということにこだわり続けてきた人間として、いわば遺言のように語ることとはあるとおもいます。

若い人には、今自分は、最初に何に出会ったのか、どういう人生、どんな15年、どんな20年を生きてきたのかを考えてほしい。物知りのおじさんやおばさんの戦争体験を聞くだけでなく、自分はこれまでどんな風に生きてきたのか、どういう風に社会と繋がってきたのかを丁寧に思い返してほしい。

2013年は「戦争に向かって私たちが生きていた時」になるかもしれないのです。